

子育てサークルの運営を通じた母親のエンパワメントについて —Mサークルの事例から—

管 田 貴 子¹

Research on Empowerment of the Mothers through the Management of a Group for Childrearing : From a Case Study of M Group for Childrearing

Takako Kanda

This paper focuses on the process of empowerment of the mothers with their infants through the management of M group for childrearing.

The problems to maintain the activities of M group were acquiring the meeting places and the places for a nursery, and paying for them.

Also it was difficult to find the staff, who could continue the group as a leader, after the first leader quitted M group to return her job.

However, the staff of M group were empowered in the process of solving the problems. Therefore, the group for childrearing is useful to empower the mothers. The information about the convenient places and the volunteers for the group is needed to keep the group activities for childrearing.

Key Words : a group for child rearing, empowerment, management, a case study

1 はじめに

少子化が進むわが国において子育て支援は注目されており、その流れのなかで子育てサークルの意義についても検討されてきている。国による少子化対策としての子育て支援策の特徴としては、仕事を持つ保護者が子育てと仕事を両立しやすくするための支援が中心であり、家事・育児に専念する保護者に対する公的な支援は行われず、仕事を持たない保護者への支援に代わる役割を果たしているのが子育てサークルである¹⁾。

母親同士のサポートグループを通して母親は3つの体験をすることが指摘されており、それらは第一に母親としての自己の保証(居場所をみつける、仲間から承認を受ける)、第二に子どもと生きてゆく力の獲得(情報の獲得, エネルギーの充電)、第三に自分の生活を新たに作

り直すこと(外出する自信をもち、母親以外の自分を認識すること)である²⁾。これらはどれも、母親が中心となる子育てサークルにおいて参加者である母親が体験することであると推測される。

2 子育てサークルと母親のエンパワメントの研究

このように仕事を持たない保護者への支援として注目されている子育てサークルは、各地でその実態を把握するために、主宰者や参加者に対するアンケート調査・インタビュー調査が実施されている。

浅見(1999)は多摩市において子育てサークルの主宰者とサークルのメンバーへのアンケート調査を行った³⁾。この調査によれば、主宰者が挙げるサークル設立の趣旨には5つあり、それらは(1)児童館・育児学級等の仲間の交流や情報交換(40%)、(2)親子での交流や情報交換(32%)、(3)近所での仲間(12%)、(4)障害を持つ子どもの親子の交流(12%)、(5)

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

子どもについて学び合うため（4%）であった。また浅見は子育てサークルの主催者は、サークルを「保護者のコミュニケーションや情報交換の場」と位置づけているという共通点を指摘した。加えてこの調査から、サークルのメンバーは第1子の子育て中の母親の加入率が86%と高く、子育てに不安をもつ母親が情報交換のために参加するという傾向が示された。

また品川（2001）は札幌市において、592の子育てサークルにアンケート調査を行い、サークルを類型化した⁴⁾。それらは母親が主となる活動のなかで「学習的な活動」と「楽しむための活動」の双方が行われているAグループ、「学習的な活動」のみのBグループ、「楽しむための活動」のみのCグループと、「学習的な活動」も「楽しむための活動」もないDグループであった。これらのサークルの共通目的としては、「子育ての情報交換や親子で出かける場」や、「子育てを楽しむこと」などが挙げられた。また参加者へのインタビューから、サークルへの参加によって「他の子どもを見て子育ての目安にすること」や、「サークルの話を父親にする」といった機能も果たしていることが示された。

また津田（2003）は広島市内のサークル参加者109名にアンケート調査を行い、サークルの参加によって「子育てにおける悩みや不安などが解消され、社会との接点を確認することができる」ことや、「子どもの楽しむ姿を見ることで改めて子育ての喜びを味わうことができる」といった特徴を示している⁵⁾。

自己承認と他者承認の場を求めてサークルを作ったケースでは、自己啓発のために、情報交換井戸端会議や学習会、子どもや大人のリフレッシュの場作りなどが目指されたが、会合を開く場所の確保やメンバーの固体化などの問題が生じたことが述べられている（浜崎ら、1997）⁶⁾。

これらの先行研究から、子育てサークルとは親子で出かけることができ、子育て中の保護者が集まることで子育てに関する情報交換を行うことができる場を提供するといった特徴がある。また子育てサークルの実態調査に加えて、サークル活動を通した母親のエンパワメントについての研究も見られる。エンパワメントとは「元々その人がもっている潜在的な能力を引き出すことで、その人の主体性を確保するプロセス」である（野島、2005）⁷⁾。

母親のエンパワメントに関する研究としては、母親たちが意見交換をすることで参加者同士が体験を分かち合い、エンパワメントを図る取り組みや⁸⁾、保護者が自ら持っている力と意思で選択・決定できるようなエンパワメントの実践の重要性が指摘されている⁹⁾。

本研究では、I県内で活動する子育てサークル（以下Mサークルとする）のスタッフである乳幼児をもつ母親を対象として、サークルの企画・運営を通した母親のエンパワメントの実態を捉え、サークルの意義を明示する。またサークルの運営にともなう課題について明らかにすることを目的とする。

3 Mサークルの特徴と活動

(1) Mサークルについて

Mサークルの代表者は第1子の子育てのために、育児休暇をとっている小学校教諭の母親A（30歳女性）である。母親Aは同年代で子育て中の母親を中心に、スタッフを集めてMサークルを立ち上げた。筆者はMサークルのスタッフの1人として企画・運営にかかわり、サークル活動にも参加した。

Mサークルは母親AがI県の子育て支援事業に申請して補助金を受けた後、2006年7月に活動を開始した。Mサークルは2006年8月から同年12月までに月1回活動を行い、合計5回実施した。

Mサークルでは、参加者がお茶とおやつを食べる時間を設けており、参加者は毎回500円（第1回は製作費を含めて1000円・第5回は材料費を含めて1500円）の会費を払って参加した。また毎回活動中は別室で保育士や子育て経験者、スタッフによる託児を行い、託児を希望する参加者は無料で子どもを預けることができた。ただし5回のみスタッフも全員調理活動に参加するために、有料でベビーシッターを依頼し、託児料として1人300円を集めた。託児を利用せず活動中も子どもを側におくことを希望した参加者もあり、託児の利用は参加者の判断に任せた。

(2) Mサークルの活動

Mサークルの活動の特徴としては、毎回I市内の異なった地域で、異なった施設を利用して活動を行うことがあった。これは次の2点を明らかにするためであった。それらは、第1に母親が主宰する子育てサークルが活動する上で、サークルに開放的で使用しやすい施設を明らか

にすることであり、第2に参加者が乳幼児を連れて参加しやすい会場の特徴を明らかにすることであった。このような施設に関する情報は、様々な子育てサークルが継続して活動が続けていくための基礎資料となると考えた。

また5回の活動は異なった内容で行い、毎回参加者を募集した。宣伝方法は、主にスタッフが子育て中の友人にチラシを配布して宣伝するという方法をとった。

(3) 活動内容

Mサークルが実施した活動内容は表1のとおりである。スタッフを除く参加者は男性1名を除いてすべて女性であり、全5回の参加者の合計は80人であった。参加者は主に乳幼児の子育て中の母親であり、男性1名も子育て中の父親であった。しかし活動内容によっては、保育士を目指す学生や他の子育てサークルの主催者、子どもの祖母が参加することもあった(第2回・第5回)。

表1 活動内容

回数	活動内容
第1回	【製作活動】 スクラップブック
第2回	【講演と実演】 「食」と「家庭でできる手当て法」
第3回	【講演と演奏】 子育ての講演とお琴コンサート
第4回	【体操】 親子でエアロビクス
第5回	【調理実習】 だしのとり方と煮物作り

4 研究方法

Mサークルの代表者である母親Aやスタッフである母親6名とともに(表2参照)、筆者はサークルの活動の企画・運営にたずさわった。活動後にはスタッフの反省会に参加してメモを取り、代表者である母親Aには非構造的インタビューを行った。母親Aは反省会に参加する時間のないスタッフもいたことから、活動後にはスタッフにアンケートを配布した。このスタッフが回答したアンケートも資料とした。

表2 スタッフの主な背景

母親記号	年齢	職業	子どもの年齢 (2006年8月)
A (代表)	30	小学校教諭 (育児休暇中)	1歳1ヶ月
B	33	元会社員	1歳11ヶ月
C	26	元介護福祉士	5ヶ月
D	30	元保育士	11ヶ月・1ヶ月
E	30	元眼科助手	1歳7ヶ月
F	30	元保育士	11ヶ月
G	30	元看護師	1歳

5 5回の活動と託児形態の変容

(第1回 スクラップブック)

第1回の活動は、参加者が子どもや家族の写真を持ち寄って参加し、各自で写真を台紙にレイアウトしてシールやスタンプで飾りをつけ、持ち帰るという制作活動であった。スタッフ数名は事前に見本を作成して、室内に飾った。母親Gが講師役となり、作り方やレイアウトの仕方を説明した。参加者は3~4名で1つの机を囲んで制作し、スタッフが机を回りながらアドバイスをした。

また第1回は託児室と活動場所を参加者が自由に行き来しても良いこととした。そのため子どもの様子が気になる母親は途中で託児室に入ったり、泣き止まない子どもは託児スタッフが活動場所に子どもを連れて行き、母親に会わせることもあった。しかし、参加者のなかには子どもの出入りがあったために「ゆっくり作成することができなかった」という意見も出された。スタッフからも「親の出入りはないほうが良い」という声が挙がった。そのため第2回以降は、一度託児に預けた子どもは託児室内で預かり、子どもの様子が気になる母親はスタッフを通して子どもの様子を聞くか、または託児室の様子をのぞくだけにとどめて、託児室と活動場所の出入りをできるだけなくすことにした。

(第2回 「食」と「手当て法」の講演と実演)

第2回のテーマである「食」に関する講演には、興味をもつ保護者が多く、参加者は35人であった。

活動後にスタッフで反省会を開いたが、反省会の間もスタッフの側に子どもがいるためにゆっくりと話し合えないことや、反省会に参加する時間のないスタッフもいた。そのため母親Aは、スタッフにアンケートを配布して活動後に記入してもらうことにした。

託児を担当したスタッフからは「スタッフも講演が聞きたい」という声が挙がり(母親E、母親Fのアンケートの回答 下線部)、母親Aは講演を撮影したビデオを託児スタッフに貸し出し、スタッフのなかで託児担当者は毎回変えることにした。

母親E (アンケートから)
スタッフも子育て中で、参加者と同じように情報を求めているはずなので、当日は運営しながら会にも参加できるように託児を充実させたらどうか。参加者にはなるべく預けてもらえるようお願いし、スタッフの子を託児してもらうことで運営もスムーズにいくと思う。やっぱり自分もせっかくなら学びたいし、参加した〜い。参加者のママ達には、スタッフの私らだって参加したいのに、今回はスタッフとして伝える側にまわって頑張ってるんだよって思い、伝わってるのかな?でも「勉強になった」の声に励まされました。

母親F (アンケートから)
大人1人に子ども3人くらいの割合で、担当を決めた方が良いでしょう。託児を費用制にし、プロの人に頼んだほうがスタッフも会に参加できて良い。保育士の資格もってますが、託児をするためにスタッフになったのではないので、やはり会に参加したい思いの方が強いです。託児は専門の人に任せるべきかも!!

代表者である母親Aは第2回の活動後、「スタッフが託児で大変だったという思いをもつだけでなく、役割分担も変えて色々な役割を体験し、スタッフになってよかったと感じられるような配慮が必要」と筆者に話した。第2回を終えて代表者である母親AはMサークルを運営する上で、スタッフが達成感や充実感を感じるように配慮する必要性が出てきた。

託児に関しては母親Aから、1人の託児スタッフが担当する子どもを3人まで決めて託児するという方法が提案され、第3回からはこの方法を取り入れた。

第2回の反省会での母親Aの発話
「ある講演会に参加したとき、託児の人1人でこの3人の子どもを見るというふうに分担していたよ。安心だし、責任をもって子どもを見られるから取り入れたいと思う。」

さらに、スタッフからも活動の改善点やアイデアが提示された。例えばスタッフが作ってきたおやつレシピを紙に書いて掲示することや、講演中に参加者を呼ぶ必要があるときは、紙に書いて知らせるといった意見が出され、第3回以降の活動から取り入れられた(母親D、母親F 下線部)。

母親D (アンケートから)
おやつはなんでも使い捨てはイヤだなーと思って、あえてお皿を用意した。1回目はレシピを回したが、コピーが欲しいとの声もあった。2回目みたいに、大きい紙に書いてはっておけば、やる気のある人(おやつを作ってみようと思う人)だけメモしていいのかなと思った。なんでもしてもらって当たり前感じになってほしくないね。(個人的意見)

母親F (アンケートから)
2回目はママが必要になった子(授乳など)に、ママを呼び出そうにも講演中で声をかけにくかった。大きな紙に「○○ちゃんのママ、託児ルームまで行って書いて見せれば、楽チンかも。子とママの顔と名前がぱっと一致せず手間どったから。

Mサークルの特徴として、託児に子どもを預けることで参加者は活動に集中して取り組んだり、じっくりと講演を聞いて子育ての知識を得られるという利点があった。サークルにも託児があることは参加者から好評であり、託児は継続していく方向で話し合いが進められた。

しかし託児には人手が必要であり、外部にベビーシッターを依頼するには費用もかかるため、スタッフが託児を担当することが多かった。そのため、スタッフからは「活動に参加したい」や「託児するためにスタッフになったのではない」という声が挙がり、第3回からは外部のベビーシッターを取り入れて託児にあたることとした。

(第3回 子育ての講演とお琴コンサート)

第3回は親子の関係に関する講演と、親子で聴くお琴コンサートが開かれた。講演会では数名のスタッフが託児を担当したが、外部のベビーシッターにも依頼したため、講演を聞くスタッフも数名いた。コンサートはスタッフも含めて親子で演奏を聴いた。

第3回の反省会では、託児担当者の中に1人代表者を作り、どのスタッフがどの子どもを担当するかを最初に割り振って、代表者が直接申し送りすることが提案された。

(第4回 親子でエアロビクス)

第4回は親子でのエアロビクスを行い、スタッフも親子で参加できたことから、「楽しかった」「リフレッシュできた」と満足する声が出た。

スタッフからも出た。

母親E (アンケートから)

体を動かす活動だったので、お茶た〜っぷりでグーでした。フルーツバスケットで、みんなの気持ちが和み、情報交換にもなってよかったです。

またスタッフからは講師の紹介や会費のおつりで問題が生じたことなど、各自が担当した役割に関して反省と改善点を挙げた(母親C, 母親F 下線部)。

母親C (アンケートから)

先生のプロフィールなど、前もって調べておくべきだった。

母親F (アンケートから)

第5回目は金額もUPするので1万円札が出てきてもいいように(おつりを準備)しておいた方がいいと思いました。収入に余裕がないのにおつりを用意するのは大変だとは思いますが…。

(第5回 だしのとり方と煮物作り)

最後の第5回は、講師を招いて調理実習を行った。事前準備に不備があったことや、託児の受付を担当したスタッフからは1人で受付するのは慌しく、改善が必要であるという意見が出された。

母親C (アンケートから)

前もって紙をもらって、どのように準備したらよいか書いてあったのに、しっかりと見てなかったためにござを忘れてたりして、アタフタとしてしまった。

母親E (アンケートから)

託児の受付はアンケートを書くのと子どもの名前をガムテープに書くのとやはり忙しい。あわただしいので…ごめんなさい。何かいい案があればいいのですが…。

5回の活動を通して、参加者からの託児継続の希望と、スタッフからの「託児担当ではなく活動に参加したい」という両方の声に答えるために、託児の形態は以下のように変化した。結果的に有料ベビーシッターに頼らざるを得なくなっていくが、このことで運営費がかさみ、活動の継続が難しくなるという課題も生じた。

表3 託児形態の変化

回数	託児
第1回	スタッフによる託児。活動部屋と託児室をスタッフと参加者が自由に行き来。【参加者から活動に集中できないという声】 ↓
第2回	スタッフによる完全託児制(基本的に参加者の託児室への出入りなし)【スタッフより「託児をするためにスタッフになったのではない」という声】 ↓
第3回	有料ベビーシッターを依頼し、スタッフ数名と託児。託児を担当したスタッフには講演など活動中のビデオを配布。 ↓
第4回	親子活動で託児なし。 ↓
第5回	外部の有料ベビーシッターに任せる。

(スタッフの振り返り)

スタッフからは全5回の振り返りとして「楽しかった」という感想が出され、「勉強になることがたくさんあった」という知識を得た充実感や、「いろいろな人に会ったり、話したりできて楽しかった」という人間関係の広がりをMサークルの利点として挙げた(下線部)。

母親C (アンケートから)

毎回楽しくて勉強になることがたくさんありました。

母親F (アンケートから)

数回のみ参加でしたが、とても楽しくいろいろな人と会ったり、話したりできて楽しかったです。どうもありがと〜。

またサークルの運営に関しては、会計を担当した母親Eから「事前に出資金があると良い」という意見や、母親Fからは「当日はそれぞれの母親がスタッフとして、仕事をこなしている」という肯定的な意見が出された(下線部)。

母親E (アンケートから)

スタッフからの出資金というものが最初であればよいのではと思います。1年間で余れば返金ということも。

母親F (アンケートから)

とにかく時間ももったいないのでテキパキやらねば!!と思い、思いつくことからやっていったのみです。分担はうまくわかれ、それぞれの仕事をこなしていると思います。

(代表者の振り返り)

代表者である母親Aには、第5回終了後に非

構造的インタビューを筆者宅で行った。(2006年12月29日)。母親Aは活動を継続するための問題として、母親Aが職場に復帰した後はMサークルの中心となって活動ができなくなることや、次の代表を引き受ける母親がいないことを挙げた(下線部)。

代表の引継ぎについて(2006年12月29日)

母親A:「私も4月から職場に復帰するから、中心では活動できなくなるし。引き継いでくれそうな人もいないし。」

筆者:「やってもいいという人は(スタッフのなかに)いなかった?」

母親A:「うん。大変そうだからって」

筆者:「母親Aさんがすごく頑張ってくれている姿をみんな見ているからね。」

母親A:「そこが反省点なの。私は『やりたい人』だから。スタッフは見てて『大変なんだろうな』って。私は好きでやってるんだけど…。」

母親AはMサークルの活動の継続について、スタッフの環境も変わることや県からの補助金が1年限りで終わることから困難であると述べた。またMサークルのスタッフは受身ではなく、自発的に活動に参加していたと評価した(下線部)。

活動の継続とスタッフについて

(2006年12月29日)

母親A:「(活動を継続するための問題として)
「まず私は仕事するようになるし、
予算が今度ではもらえないということ
でしょ。それにスタッフも今回は遠
方からでも参加してくれたけど、こ
れからは参加しないと思う。やるな
ら地元で新しいサークルを自分でや
るって。それはそれでいいんだけど。」」

筆者:「スタッフは何か充実感とか得たものがあったのかな?」

母親A:「母親Eはサークルに参加して『普段の生活にはない刺激だった』と言ってたよ。スタッフは受身ではなく能動的に参加したよね。」

6 Mサークルで生じた課題とエンパワメント

【Mサークルの活動上の課題】

Mサークルの活動を通して生じた課題としては以下のものがあり、それぞれについて代表者である母親Aを中心に話し合い、意見を出し合うことで課題を解決していった。

- (1) スタッフが託児を担当することについて
⇒保育士の友人などに有料でベビーシッターを依頼し、スタッフは託児をしないように変えていった。
- (2) ミーティングや反省会の時間がとりにくい
⇒事前に当日の役割分担をメールやプリントで配布した。活動後の反省会に参加できないスタッフもいたため、アンケートに回答してもらった。
- (3) スタッフのモチベーションの問題 ⇒託児
スタッフには講演のビデオを配布した。参加者のアンケート結果をスタッフに配布することで、スタッフはフィードバックを受け、達成感を味わった。
- (4) 会場の情報や会場の確保・会場費の問題
⇒子育てサークルの活動を行いやすい会場についての情報が得られにくく、公的な施設を利用しても会場費がかかった。行政にこのような実態を報告し、子育てサークルの拠点となるような場所の確保を求めることにした。
- (5) 後継者の問題・活動継続の危機 ⇒特に代表者の負担が大きいため、母親Aが職場に復帰した後は、引き継いでサークル活動を継続しようという母親が出てこなかった。行政から補助金を得て活動することで、参加者を固定せずに多くの親子の参加を呼びかけることが可能になったが、補助金を得るような特徴的な活動をするためには、スタッフの負担も大きく継続されにくいと言える。

【スタッフのエンパワメント】

代表者である母親Aは、Mサークルにスタッフとして参加したそれぞれの母親が担当した役目を果たし、アイデアを出し合って活動日には自身の判断で対応するという運営力がついたと見なした(下線部)。

スタッフのエンパワメントについて

(2006年12月29日)

母親A：「他のサークルでは、お母さんの力を奮い起こすことを目的にして、お母さんが料理教室の講師をしているサークルもあるよ。母親の企画力をつけて、行く行くは親子サークルを作ったり、得意分野を活かすような支援活動をしているみたい。」

筆者：「Mサークルでも言えることはある？」

母親A：「母親Dや他のスタッフも毎回おやつ作りをしたし、母親Cは記録で写真を撮るときに、写真の取り方を工夫していたよ。母親Bの託児のアイデアはすごかったね。母親Eはおつりの準備とかしてくれたし、それぞれが手際よくやってくれたよね。当日の運営力というか、判断力がすごくついていると思う。安心して任せられたよ。」

【代表者のエンパワメント】

母親AはMサークルの活動を振り返って、自身がやりたいと思った活動を全てできたという充実感と、行き場の少ない0, 1歳児の親子が参加できるMサークルを発足し、活動をやり遂げることができたという達成感を述べた(2006年12月29日 下線部)。

母親A：「やりたいことは全部できて楽しかった。できるという自信はあったけど。」

母親A：「児童館は1歳を過ぎないと参加できないことがMサークルを始める動機としてはあったの。せっかくの育児休暇は1年間だけ。休みはあっても家で母子2人だけで息詰まる…。だからサークルのターゲットは0歳児、1歳児を持つ親子だね。託児も通常は1歳児以上から可だから、Mサークルでは0歳児も受け入れたよ。」

7 おわりに

Mサークルの5回の活動は、活動や託児の形

態を変えながら進められた。その過程においてスタッフとなった母親はアイデアを出し合い、次回の活動に活かすことで改善し、当日はそれぞれが担当する役割をこなして達成感を味わったと言える。

前述したように、エンパワメントとは「元々その人がもっている潜在的な能力を引き出すことで、その人の主体性を確保するプロセス」である¹⁰⁾。Mサークルのスタッフとなった母親は、出産前に仕事をしていた母親が多く、それぞれに専門的な知識や能力をもっていた。そのような知識や技術を活かしながら主体的にサークル活動に参加することは、子育てをする母親としてだけでなく、社会的な活動のなかで力を発揮する存在となったことを意味する。

スタッフのなかには、Mサークルでの5回の活動後は自身でサークルを立ち上げる予定の母親もいた。Mサークルは母親が自身で新しい活動を始めるための経験と自信を培う場となったとも言える。

子育てサークルは母親自身が考えを出し合い、活動を通して生じた課題や個々の葛藤を解決する過程を経て活動が進められていく。このようなサークル活動が母親のエンパワメントにおいて果たす役割は大きいと言える。

しかしながら、実際にはサークル活動の場所、活動費や託児などの問題を抱えており、補助金が受けられなければ活動の継続は難しいと言える。よって母親によるサークル活動を支援するためには、親子で使用しやすい会場や託児ボランティアに関する情報提供、子育てサークルの活動の拠点となるような施設の開放といった取り組みが求められる。

引用文献

- (1) 津田亜矢子 2003 地域における子育て支援—子育てサークルが持つ意味・役割の探求、そして、その「場」の活用について—。広島大学マネジメント研究3, 136.
- (2) 原田紀子 1996 子育てをしている母親のサポートグループを通じたエンパワーメント。看護研究 Vol. 29 No. 6, 47-57.
- (3) 浅見均 1999 多摩ニュータウンにおける育児に関する一考察—子育てサークルメンバーへのアンケート調査から—。日本保育学会大会発表論文抄録52, 682-683.
- (4) 品川ひろみ 2001 子育てサークルの多面的機能—母親にとっての機能を中心とし

てー。日本教育社会学会大会発表要旨集録
53, 184-185.

- (5) 前掲 (1)
- (6) 浜崎幸夫・市原由美子・田中昭子・松本
秀蔵・佐々木宏子 1997 伝統的子育てに
何を学ぶか。日本保育学会大会発表論文抄
録50, 62.
- (7) 野島正剛 2005 保育者のソーシャルワ
ーク, カウンセリングと家族支援ー親のエン
パワメントー。上田女子短期大学28,
41-50.
- (8) 坂倉裕子・丹羽あおい 2004 親・保育
を楽しむためのコミュニケーション学習
「子育てコミュニケーション心理学(CPN)」
の実践Ⅱー学習者のエンパワメントにつな
がる教授法ー。日本保育学会大会発表論文
抄録57, 656-657.
- (9) 前掲 (7)
- (10) 前掲 (7)

謝 辞

本研究を進めるにあたり、ご協力いただきましたMサークルのスタッフの皆様に感謝申し上げます。

また広島大学の七木田敦教授より貴重なご示唆を賜りました。お礼申し上げます。